

1994年のメキシコは、NAFTA（北米自由貿易協定）の発足とチアパス州での先住民の反乱という、相反する出来事からはじまった。これは先進国入りを目指すメキシコと、それとは別個の、もう一つのメキシコの存在を世界に印象づけたのである。

さらにPRI（制度的革命党）の大統領候補コロシオの暗殺が続いたため、メキシコの社会状況はかなり混沌としているのではないかと思っていたが、この4月と5月の二度にわたってメキシコを訪れた時の印象は、いつにも増して平穏だったということである。

ただメキシコ市などの大都会で目についたのは、アメリカの企業や製品のすさまじい進出ぶりであり、また風俗習慣もNAFTA世代と呼べる若者を中心に、アメリカ的なものが支配的になっている。したがってこの点では、確かにメキシコは激動期にあるといえる。

チアパスで反乱を起こしたEZLN（サパティスタ国民解放軍）のニュースは、マスコミを賑わせてはいるが、現地以外では市民生活への影響は全くない。しかし彼等に対する同情や精神的支援が貧しい人々の間で根強いのも確かであろう。

去る4月10日に、私はメキシコ市の中央広場ソカロへ出かけてみた。アステカ時代の習慣である、一つの時代の到来を告げる「新しい火」の儀式が行なわれるので、それを見物するためであった。メキシコにおけるカトリックの総本山というべきカテドラルの前で、羽根飾りをつけた先住民たちが、古代の宇宙観が示唆するような自分達の時代が再来することを願って祈っているのだ。

ソカロへ行ったもう一つの理由は、この日が土地と自由を求めて戦ったエミリアノ・サパタの没後75周年に当たるので、それを記念するデモがそこで行なわれるからである。

メキシコ各地から集まったデモ隊は、「サパタは生きている」という合い言葉の他に、「チアパスはメキシコだ」という言葉を叫んでいた。これは貧困などの問題を抱えているのはチアパスだけでなく、メキシコ全土だという意味であろう。デモの参加者は先住民出身者か、色の濃いメスティソであり、白人の姿はほとんど見られなかった。このデモは反政府的なものであり、サパタと共に、EZLNのマルコス副司令官が立て役者であった。

他方、サリナス大統領はこの日、クエルナバカのテオパンソルコで行なわれたサパタの記念式典に出席し、「エヒードが消滅することも、ラティフンディオが再現することもない」と強調した。また「サパタの戦いを続行しよう」と述べ、政府もサパタ主義者であることを表明していたが、その内容はEZLNとは相対するものであろう。このねじれ現象をどう解消するかということが、メキシコの課題なのである。